特別支援教育の扉 №１９６　　令和８年８月21日発行

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」



特別支援教育統括コーディネーター　加賀谷　勝

「子どもへのまなざし」

８月５日（水）、秋田県聴覚・言語障がい教育研究会が能代市中央公民館で開催されました。午前は難聴、通級（言語）、ＬＤ等通級（小学校・中学校）の各分科会、午後は国立特別支援教育総合研究所の牧野泰美先生による講演会でした。講演会で心に響いた言葉の一部に、私の思いも加えて紹介します。

○多様な角度から、多様な見方をする

通級指導教室は、「文字が枠からはみ出してしまう」「気持ちのコントロールが難しくて友達とトラブルになる」など、初対面で子どもの課題と向き合う場所である。しかし、目の前の子どもに「あなたはここができない」と欠点や問題点を指摘されると気が重くなる。また、自分の価値観で子どもを見てしまうと、追い詰めることになる。子どもの感性をまるごと受け止める。そして、その子の得意なことを生かした役割を与え、みんなから喜ばれる経験を重ねて、「私は私のままでいい」という自己肯定感を高める。

子どもを育てようと思ったら、雑草をすぐ刈り取るのではなく、芽生えた美点に注目し、地道に水や肥料、愛情を与えなければならない。子どものよいところを見る目をもっているか。子どものよいところをすぐ言えるか。

○子どもにとっての教師のありよう

□ありのままでいられる相手　　□その場に黙っていてもいい相手
□自分が出せる相手　　□話したい相手（話を聴いてほしい相手）
□ホッとできる相手　　□安心して一緒にいられる相手
□元気が出る相手　　□前向きな気分になれる相手

関わり手が子どもの真の相手となることで、深い対話、必要な学び、自己理解ができる。そのためには、子どもと「同じ目線で向き合う」、「一人の人間として尊重し合う」という真の対等性が必要である。

子どもは教師のまなざし（障害観、教育観、世界観）を通して、自分を見つめ、どうしたらよいか、どうしたいのか、どうやって楽しく過ごすかを考えて成長する。子どもから「そばにいてくれるだけでいい」と言われる教師でありたい。

○保護者の不安は一生続く

保護者の障害受容は、らせん階段を行ったり来たりしながら登っていくと言われているが、保護者の子どもへの不安は、ずっと消えることはない、保護者の不安を子育ての原動力に変えるために、安心材料（子どもの頑張りや伸びている点等）を伝え続ける。

吃音のある子どもが苦しいのは、吃音でいられない環境である。子どもが今ある未熟な力、手持ちの力を全て使い、安心して次の段階に楽々いけるように保護者を支えていく。保護者の見方が変わると、子どもは変わる。

とれたて直送便



【全国デビュー？】

教育開発研究所が発行する月刊誌『教職研修９月号』の特別支援教育「保護者とともに描く」のコーナーに私の拙稿が掲載されます。テーマは「保護者の育てづらさに寄り添う」～理解は偶然に起こり、誤解は必然に起こる～です。就学相談等で保護者と関わった経験を基に、保護者の心理や寄り添った支援を紹介しています。次号で紹介しますので、ご期待ください。